

# The Reminiscence of Exellia NG+1

「その先を思い描くもの」

## キャラクター作成レギュレーション

### 基本概要

- ・ 経験点：5500 点
- ・ 資金：9500G
- ・ 名誉点：500 点
- ・ 成長回数：5 回

### 各種制限について

- ・ ヴァグランツ禁止
- ・ 蛮族 PC 禁止
- ・ ソード・ワールド 2.0 / 2.5 標準流派への入門、及び秘伝の習得・使用の禁止
- ・ 武器防具強化禁止
- ・ 《防具習熟 A / 盾》《防具習熟 S / 盾》の削除、及び装備可能ジョブの制限
- ・ ジョブ別の習得技能制限
- ・ レベル制限 2～3

## 導入

(※GM メモ：エクセリアの随想)

…彼らは聞いただろうか。

私が「コズミック・キューサー・ドラゴン」に転じる直前、私の前にはローブ姿の人影がいた。そして、その奥に見えた眼差しは虚であり、それが己である、と理解するのは容易かった。

その裏で動いている存在も、概ね察することができた。あまりにも惨い話だ。

なればこそ、私は、あえて『悪役』として振る舞うとしよう。

それが、彼らの成長につながるはずだと信じて。

(※GM メモ：ここから導入)

エメリーヌ

「今日は、ある竜騎士からの依頼が来ているわ」

そう言って、エメリーヌは青い鎧の槍使いを紹介する。

エルンスト

「初めまして、新米冒険者諸君。

これは、ニーズヘッグが直々に依頼を出してきたもんでな。なんでも、先日現れた竜型の召喚獣…。あれを討伐するためにも、情報が欲しいんだとよ。

率直に訊こう。アレは、なんだ？」

PC への選択肢

- ・エクセリアじゃないかな
- ・嘗て…私達を滅ぼした…

エルンスト

「なんだと…！？やはり、『例の計画』は進行していたか…」

リーン

「…『例の計画』？」

エルンスト

「人類抹殺計画。世界を定義し、そして破滅させるのは人間であるとする、ヴァルマーレの過激派…、『財団』と呼ばれる連中が、最強の神と結託して進めている…、文字通り、ラクシアという惑星から知的生命体と呼べるものを消し去る計画。

これは複数枚の札によって行われる計画でな…」

君達はここで、「冒険者+知力判定」を用いて理解できたかどうか判定しなければならない。（※GM メモ：1 ゾロしなければ、理解できないなんて馬鹿なことはないのだが）

かいつまんでその計画の札の内容を語ると。

第1の計画である「ミュトス計画」。あらゆる召喚獣を喰らい、万能の超越者を生み出し、世界を破滅させる計画。

第2の計画である「エイコニック・ワールドホール計画」。単一の召喚獣、あるいは蜚神に、世界を構成するエーテルのすべてを喰らわせ、世界を破滅させる計画。

そして、第3の計画——「ファンタズマ・ビーイング計画」。人の自我を機械化し、闘争にのみ心情を固定して、終わらない戦争によって世界を破滅させる計画。

第1の計画の犠牲者がエクセリア、第2の計画の犠牲者がリーンだったというが…。

エルンスト

「エクセリアの場合は、その馬鹿力で脱走。リーンの場合は、エクセリアが逃げる脚で襲った先から回収、っていったところだ。第3の計画は志願制だって話だが、果たしてどうなんだか」

エメリーヌ

「そんな。だとすれば、エクセリアが唐突にリーンを襲ったのは…！？」

エルンスト

「何らかの経緯で、リーンのことを仇敵と錯覚。あるいは…、黒幕の考えを遂行するために『疑似氷神シヴァから力を奪う』ことで、世界を破滅させる計画を進行させようとしていたか…、だな」

「いずれにせよ、今のエクセリアは俺達にとっての脅威だ。そこで、ニーズヘッグの依頼だ…。奴はブルーアウト樹海南方の山岳地帯にある遺跡、『古竜の頂』に行ったらしい。

そこで何をしているのかの調査、あわよくば討伐せよ、とのことだが…、相手は暗魂の暁の主要人物だ。殺すことはできない」

「よって、せめて古竜の頂だけでも調査はしておきたい。

という理由から、君達を抜擢した、というわけだ」

君達は、いずれにせよ、向かうしかないようだ。

「古竜の頂」——嘗ての篝火世界にあった、遺構の名を冠する遺跡へと。

### 「終滅の幻想」の所以

君達は、古竜の頂、その大鐘楼の前に立った。

そこやその向こうには、疑似氷神シヴァを買いた獣はなく。

ただ、引けと言わんばかりにおかれている『レバー』だけがあった。

エルンスト

「…罠か？」

君達はさまざまな判定を行う必要がある。

探索判定（スカウト観察） 目標値：11

成功時、それが罠ではなく、大鐘楼を起動するための仕掛けであることが分かる。

(※GMメモ：RP待機)

エルンスト

「仕掛け、だと…？」

「……………」

「そうだ。それは、太陽の長子…今はもう、『無名の王』としか呼ばれぬ神を呼ぶための鐘だ」

そこへ、リザードマンが流暢な交易共通語を喋りながら近付いてくる。

テラージャ

「申し遅れた。俺の名はテラージャ。この遺構の最高責任者だ。

無名の王に用があるのか？」

(※GMメモ：RP待機)

テラージャ

「ほう。最後の薪の王が転じた竜、か…。分かった。大鐘楼を鳴らして嵐を起こそう」

そう言って、テラージャは大鐘楼を起動するレバーを引く。

レバーの奥にある仕掛けが回り出し、そして鐘が揺れ出す。

荘厳に鳴り響く大鐘楼。その鐘は、嵐を呼び起こした。

そして…、風を歩けるようになるという怪奇現象と共に、大鐘楼の先へと行けるようになる。そこで、君達は大いなる存在に出くわすことになるだろう。

無名の王

「祭祀テラージャ。我を起こすとは、何事か？」

テラージャ

「太陽の長子様。彼らの身内に、異常事態が発生したようでして」

無名の王

「…こいつらの？ハイデリンの加護を受けた光の戦士のようなだが…。

このソウルの断片は…、そう言うことか。お前達、難儀な時代に生まれたな。まさか、此度の災禍を齎していた元凶が、星の記録者その人だったとは」

PC への選択肢

- ・ 星の記録者？
- ・ それってまさか…

テラージャ

「この遺跡には、彼女の旅路が記されています。

生まれついた『灰』としてこの世に落ちた彼女は、最初こそ、名も知らぬ誰かから乞われた『火継ぎ』の使命を果たそうとしました。しかし、気付いてしまったのです。世界を照らす太陽が、ダークリングの形になった、その瞬間に。

彼女は決めたのです。火継ぎという悍ましい文化を、そしてそこに根付く文明を尽く焼き尽くさなければ、と」

無名の王

「そして、我が父祖グウィンを含んだ、火継ぎの王たちの集積体…『王たちの化身』に、彼女は一つの回答を叩きつけた」

そう言って、無名の王は一つの石塔を、槍で指し示す。

そこには、火を纏った王と、先日見た竜のような異形が描かれていた。

無名の王

「転身。己の外側に更なる肉体を生み出し、己の存在を強化する術式。

それが、『火の時代』の最後の発明にして、最強の術式となった。過去の術式しか使えない王たちの化身では、彼女に敵わなかったのだ。

そして…最初に火を継いだ王が目覚め、太陽の光の力を以て反撃を試みた」

(※GMメモ：RP 待機)

無名の王

「結末は単純だ。彼女が転身で出した竜には、雷は効かなかった。太陽の光、雷とも呼ばれるそれは、彼女には通用しなかったのだ」

テラージャ

「では、彼女を倒すことは…？」

無名の王

「この結末は、今人が描いてしまった落ち度だ。責任は貴様らにある。

だが…、先んじて、貴様らの実力を測る必要があるだろう」

そう言って、無名の王は背負っていた剣槍を構える。

無名の王

「彼女は『終滅の幻想』という二つ名を持っていてな…、その名の通り、『開闢を否定することで終焉を否定する』という権能を有する。お前達も目にしただろう？ 剣の加護を奪わんとする、1巡前の世界の人々を。

なればこそ、俺は貴様らを測らねばならない。開闢を否定する終滅の幻想を退けるだけの実力があるかどうかを。

古き神の末裔にすら及ばぬようならば、終滅の幻想に挑むべくもない。

この場で朽ち果て、その魂を終滅の幻想に捧げるといい。

さあ——構えろ」

(※GMメモ：RP待機)

(※GMメモ：BGM「Dawntrail」)

**敵：無名の王**

**初動（剣槍薙ぎ）突破時**

無名の王

「この程度、わけねえってか！」

**エンシェント・ゲイルスコグル詠唱時**

無名の王

「古の竜狩り、その力の一端を見せてやろう…！」

**HP83以下：鐔迫り合い**

無名の王

「乗り越えてみせるか。ならば、貴様らの絆の力、試させてもらう！」

**PC全体に対して、この処理を実行する。**

**生命抵抗力判定の後、命中力判定または魔法行使判定の中で最も高い基準値の判定を用いて判定を行う。**

生命抵抗力判定、またはその後の判定のいずれかにおいて、失敗者 1 名につき 1 点カウントする。

このカウントの合計が 20 に到達した場合、PC 全体に「対象の最大 HP の 16 万倍」のダメージを与えて即ワイプ。やり直しとなる。

このアクティブタイムマニューバー処理は 10 回行い、10 回成功させるか、カウントが 20 になるまで繰り返す。

生命抵抗力判定 目標値：11

命中力 or 魔法行使判定 目標値：9

君達は、無名の王の「渾身の一撃」を凌ぎきっただろう。

無名の王

「ハ…、これをずっと凌ぐとは…。驚いたものだ、今人も捨て置くべきものではないな」

**戦闘はここで終了です。**

無名の王

「ならば、語るとしよう。彼女が受けた、人類抹殺計画の第 1 段階…ミュトス計画の顛末を」

その直後、君達はひどい目眩に見舞われる…。

## ミュトス計画

1000 年前の出来事だ。

ある男がいた。

男の名はアイザック。その時代…魔動機文明時代の、退廃していく世界に対して絶望した、ひとりのナイトメアだ。

彼のようなナイトメアは、生まれる前から殺され水子と化すことが多くなり、そのくせ人々は皆総じて生を説く。明らかにおかしく、それでいてその矛盾を正す者は誰もいなかった。

そんなアイザックは、あるとき『水色の結晶塊』の付近にいた亡霊のような存在を目撃したという。彼が目撃した亡霊のような存在の名は、アルテマ。

彼は、アイザックに対して「器となる存在」を求めた。完全生命魔法レイズの発動に耐えることが可能な、完璧な身体を持つ者を探せと。

アイザックは彼に問うた。「その代償として今の世界が滅んでも構わないのか」と。

彼は首肯した。その日から、アイザックにかかっていた「枷」が外れた。

彼はミュトスの候補なり得る存在を、己を機械化してまで探し求めた。

アイザックの名を棄て、『財団』を名乗るようになってまで、彼は世界を破滅させることのできる『逸材』を探し求めた。

そうして見つけた『逸材』は、穢れてすらいないのに魂が暗かった。

——エクセリアとの邂逅だ。彼は、彼女に対して資金の供給を約束すると共に、世界を滅茶苦茶にしたいと申し出た。

そのときの彼女は、今の魔動機文明時代を指してこう言った。

エクセリア

「お前の思想には同意するが、私なんか使って何をしようと言うんだ？

所詮は、魔動機の力を借りて生きながらえているだけの、知能を持った生命体。お前が邂逅したという神、アルテマもまた、何らかの受け皿を用いて生きながらえたいだけの生命体に過ぎないだろう」

財団

「そんなことはどうだっていいんだ。僕は、世界を滅茶苦茶にしたい。

我が神も、今の世界がどうなろうと関係ない、と申し出てくれたんだ。

君もまた、退廃していくこの世界にうんざりしているんだろう？ だったら、滅茶苦茶に破滅させようじゃないか」

アイザックは——財団は折れなかった。

彼女の、的を射た正論すら聞く耳を持たず、彼女の本心、世界の破滅を望む願望だけを言い当ててみせたのだ。

それから始まったのが、彼女の身体を解き明かし、改造し、アルテマの器——ミュトスとするための実験の数々だ。

彼はその中で、エクセリアの『転身』と呼ばれる力に目をつけ、改造を施し、アルテマの器たり得る力をつけたのだ。

——が、それが仇になるとまでは、当時の財団をして考えつくことはなかった。

場面が切り替わる。

燃える実験施設。その中で、エクセリアはアルテマに対して剣を突きつけていた。

アルテマ



「何をするつもりだ、ミュトス」

エクセリア

「お前の目的を辿っていくと、どうにも面倒な結末が訪れることが容易に想像できてな。

お前…、この世界を滅ぼし、同胞たちを蘇生させたとして…、その先に『黒の一派』が現れることがない、なんて確証ないだろ」

アルテマ

「…ッ!？」

エクセリア

「アイザック——今は『財団』なんて名乗ってるんだったか。あいつの思想には同意はするが、かといってその結末が、お前にとって都合の良い話になるとは到底思えない。

それに…、お前が編み出したレイズの術式を読んで思ったことがある。

無駄が多すぎる。そんなに長い術式を組まずとも、お前の求める結末は得られるよ。

器が必要であることには変わりはないがな。とにかく、お前の地元が滅んだ原因は、終末の災厄…。星降る夜に起きた、同胞たちが腐り落ちる現象だろう？」

アルテマ

「…貴様…どこまで知っている…？」

エクセリア

「星っていうのはな。星系内だけでなく、他の星系内の惑星とも、有益な情報を交換するネットワークを構築する。その中に、興味深い情報があつたんだ。

1 番目（エーナ）…文明形成の痕跡あり。住居と思しき建造物はあるものの、現存する生命はなし。

3 番目（トゥリア）…都市と呼べる住居集合体が現存。知的「生命」は存在しないが、かつてそうであったとする思念体が残留している。

16 番目（デカークシ）…全身を機械化した知的生命体が存在するものの、活動と言うべき活動を行っていない。

18 番目（デカオクト）…星の隅々まで、知的生命体にとって致命的な毒素がばらまかれており、現存生命は存在したものの、数刻のうちに死滅。

…愚かな人々が、探査をするための使い魔を飛ばした末に、使い魔はある結論に至ったのさ。

『絶望はいつだって、希望よりもひとつ多く用意されているものだ。幾度命は今日を悔やみ、明日を憂う。生ある時間の、果ての果てまで』とな。

だから、お前の地元、母星たる星は、終末現象によって、ソイツに滅ぼされた。

この星だってそうだった。あとひとつでも、かけるボタンが間違っていたのなら…、お前がこの星に辿り着くその前に、ここも腐り落ちていたかもしれないのさ」

そうして、彼女はアルテマの器になることこそ許容範囲としつつも、それだけでは根本的な解決には至らない、として。

アルテマに「来たるべき時まで人へ干渉しない」ということを約束させつつ、エクセリアの身に封じられることとなった。

…君達が、目眩の中で見た光景は、ここで終わっている。

### アイザックの野望

無名の王

「…つまるところ、あいつは『使い魔』を生み出した星に住まう人間を恨んでいるのであって、アルテマやアイザックは恨んではいなかったわけだ。

事実、俺も、封印中だったとは言えアルテマとエクセリアに対面したしな」  
エルンスト

「だとすると、アルテマは今んところ沈黙を保っている、と見たほうがいいか？」

(※GMメモ：RP待機)

無名の王

「さてな。エクセリアが召喚獣を…、転身態の『中途形態』である『コズミック・クェーサー・ドラゴン』に顕現したことを考えると、少しばかりアルテマの思惑を疑わざるを得ないが…。エクセリアがアルテマの母星に降りかかった災厄に関して話をしたあたり、どうもアルテマ当人は関係なさそうだ」

(※GMメモ：RP待機)

無名の王

「なんだと…？知己の人間を、別の何かと誤認した可能性がある…！？」

無名の王は、心底驚いたような様子で君達を見る。

テラージャ

「長子様を含め、嘗て火の時代に生きた者達は、皆『存在定義を見る』ということができます。それが示す、本来の形から、敵かどうかを見定めるのです。

エクセリア様だってそうでした。彼女も、長子様を見て、敵対するかどうかをまず見定めて、判断していたのです」

無名の王

「その彼女が、何かを誤認して顕現した。…十中八九、それが『できる』奴はひとりに絞られる。流石のアルテマでも手が出ない、『存在定義の歪曲』ができる輩と言えど…」

場を沈黙が支配する。

PC への選択肢

- ・もしかして、財団とか言うやつ？
- ・魔動機で干渉したのでは？

無名の王

「…あまり考えたくはないが、もしかしたら、アイザックが、『機械的』に彼女の視界を支配したのではないだろうか。

人々が機械などと呼ぶ代物であるあの無機物に、どのように『存在定義を視る眼』を歪めたのか。その事実を知ることだけに留まらず、察することさえもできない。

だが、アイザックという輩であれば『できる』という、謎の確信だけがある。

俺が、現状を鑑みて言えることは、今のエクセリア…『コズミック・キューサー・ドラゴン』は…、アイザックによって『世界を破滅させる暴力兵器』として作用するように仕向けられている。

『かつて、世界を破滅させた力』。その一端たる『最後の薪の王』の『転身態』。

中途形態とはいえ、それが暴走した場合の災厄は、彼女でさえも知っているほどだ。

だが…、アイザックが望んでいるのは、局所的な破滅ではない」

そう言って、彼は 2 万 4000 年前から現在に至るまでの災禍の歴史を記した碑文字を見せる。

無名の王

「1 万 4000 年程前…。この惑星を襲った災禍である、流星の惨劇。

エクセリアは、これを『終末の災厄』と呼んでいた。

人々が生み出す創造生物たちが、滅びへの指向性を勝手に持たされて生み出され、それによって魂さえも腐って死にゆく災禍。

それを遠ざけるべく、当時の人々は星の理…ゾディアークを生んだという。

『戒律王』の二つ名を持つその創造生物は、ひとりの核と、数多の人々の魂を糧として生み出され、綻びた星の理を敷き直した。だが、当時の人々は、あろうことか、それによって再生したか弱き生き物を用いて、捧げた人々を救おうとしたのだ。

それに反発した者達によって、ゾディアークは14に分かれた。幸い、俺のような強靱な魂を持っている者であれば、その14分割に巻き込まれることはなかったようだが」  
テラージャ

「そうして、14に世界を分割した張本人…、星の意志となった存在、ハイデリンは、加護を与えた戦士たち…『光の戦士』に加え、それぞれの時代において、すべての鏡像世界を含めて1人だけ生み出した『光の巫女』を生み出すことで、星の均衡を保とうとした。

彼女に賛同した、12人の属性神と、1人の監視者と共に」

## 蠢く野心

一方、その頃。エフェメラル参道、エッタクスの封印殿。

アイザック

『そうです。あなたは、そうして神を喰らっていればいい』

財団——アイザックは、スターダスト・ドラゴンを喰らう斑焰の召喚獣の姿を見ながら言った。

アイザック

『神を喰らい、己が内に神の力を蓄え…、そうしてアルテマの器となって世界を滅ぼせばいい。そうすれば、私達の計画は、ひとつの到達点へと至る。

最後の薪の王…宙準星の巫女を使った、人類抹殺計画の始まりだ！アハハハハハ！！』

手刀でスターダスト・ドラゴンを貫くのを尻目に、アイザックは高笑いをした。

## 報酬

### 経験点

- ・基本：3000点
- ・無名の王との戦闘を初回攻略で突破する：1500点

### 資金

- ・基本：5500G

・ 資金：3000G

#### 名誉点

本シナリオに名誉点報酬は存在しません。

#### 成長回数

4 回